

翔べ！
世界へ

国際宇宙ステーション計画 に活かす異文化交流の体験



◀国際宇宙ステーションの完成想像図
▼船外活動訓練時の筆者



る経済効果を考えることはもちろん大事である。しかし、この巨大な国際プロジェクトを通じて、人々が国家や民族、文化の違いから来るさまざまな障害を乗り越えて「協力」で

きることを示すことが、実は一番大きな成果になると、私は思っている。目に見えにくいことではあるが、それこそ人類の可能性を広げる観点からは大事なことでないだろうか。そしてそれは、UWCの理念とも一致する。

宇宙飛行士の基礎訓練では、各国が提供するISSシステムの訓練やサイババル訓練などのためにアメリカやロシア、ヨーロッパ、カナダを訪れる機会があった。それぞれの土地では短い期間ながら、お世話になったスタッフと別れを告げる時に涙が出そうになるほど親しくなることができた。ステーションという閉鎖環境では、各国の宇宙飛行士数人だけで数カ月にわたり滞在し、協力して作業することになる。これだけ複雑な計画に関わる国際調整では、各国が自分の利害に基づく主張をすることは当然あるが、その中でも皆建設的に議論を進めようとしている。「国際感覚」は曖昧な言葉だが、文化的背景の違う人と偏見を持たず理解しあおうとする姿勢、そして互いに共感できるかを意味するのではないだろうか。異なる文化的背景を持

つ友人たちと寮生活を送り交流を持ったUWCの経験は、今後も自分のバックボーンとして役立つに違いない。実際に宇宙に行くのはまだ数年先だが、国際協力プロジェクトの一員として参加できることを誇りに思いつつ、UWCでの経験を通して身につけたことを活かして、貢献していきたい。

経団連が事務局を務めている各種奨学金運営団体の活動により、毎年高校生から大学院生までの多様な奨学金が留学し、今日、その経験を活かして内外のさまざまな分野で活躍している。本コーナーは、留学先での経験と現在の活動の模様を紹介することにより、これから奨学金を送り出してきた奨学金運営団体への一層の理解促進と、これを支え、協力してくれた企業への活動報告とするものである。

(社)ユニテッド・ワールド・カレッジ(UWC) 日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒達との教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名以上の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下のカレッジに派遣し、すでに三四〇名以上の卒業生を輩出している。

お問い合わせ・連絡先
経団連社会本部

星出彰彦

ほしで あきひこ

宇宙開発事業団 宇宙飛行士



UWC東南アジアカレッジ（シンガポール、1985～87年）

1992年3月慶應義塾大学理工学部卒業、同年4月宇宙開発事業団入社。97年12月ヒューストン大学CULLEN COLLEGE OF ENGINEERING航空宇宙工学修士課程修了。99年2月国際宇宙ステーションに搭乗する日本人宇宙飛行士の候補者として選抜される。約21カ月の基礎訓練修了後、2001年1月宇宙飛行士として認定される。

幼少の夢を胸に留学を決意

二〇〇一年一月、国際宇宙ステーション（International Space Station=ISS）搭乗宇宙飛行士候補者として選抜されてから約二年が経ち、宇宙飛行士としての基礎訓練を修了した私は、宇宙開発事業団の宇宙飛行士として認定された。

幼少の頃から「宇宙で仕事をした」という夢を持っていた私が、現実に職業として宇宙飛行士を目指すと思ったのは、スペースシャトルが定期的に飛行するようになった高校生の頃だった。宇宙飛行士になるためには何が必要か、そのためには何をしなくてはならないかを自分なりに考えた。もともと留学には興味があったが、その時漠然と必要と感じたのが「国際感覚」と「英語力」であり、留学はそれらを補うにもベストだと考えた。

母校の茗溪学園は留学に関して理解があり、情報には困らなかつた。他の留学機関と違って留学期間が二年と長期であること、また基本的に各国から留学生を集めて学校を構成していて留学生として特別扱いされ

ないことも、United World College（UWC）を受験しようと思った理由だった。留学の経験がプラスにはなってもマイナスになることはないかと、両親も私の選択に賛成してくれた。

多様な民族の友人と交流したシンガポールの二年間

留学先はシンガポールにあるUnited World College of South-East Asiaだった。幼少の頃の四年の海外経験から英語力には多少自信があったのだが、到着したその日に早くも出端をくじかれた。寮の応接間で友人と話をしようとするものの、スラングが交じった生の会話は早くも多様な訛の中では、聞き取ることもできない。加えて、授業は当然全て英語である。デイスカッションやレポートの必要な経済学はもちろん、化学も書き取りがあり、ハンディを感じた。国際的に共通な「数字」が中心のはずの数学や物理ですら、授業中に息をつくことができない。最初はついていくのに必死で、週末も友人と遊びに行けないくらいだった。

三カ月が過ぎた頃、ようやく勉強以外のことに目を向ける余裕ができた。課外活動としてラグビーや演劇、学校の年鑑の制作にも参加し、長期の休みにはマレーシアやインドネシアなど、近隣の東南アジア諸国を旅行した。一年目で周りの状況を把握し、生活のリズムをつかみ、二年目には卒業試験の勉強の傍らアメリカンフットボールや学校の旅行誌の編集にも精を出すなど、さらに活動的に動けるようになった。苦勞も含めこれらの経験自体貴重であるが、多感な時期に多様な民族の友人と経験を共有し、同じ釜の飯を食い、夢や悩みを語り合えたのは何ごとにも代え難い。

文化的背景の異なる各国の協力がISS計画の鍵

私が宇宙飛行士として参加する国際宇宙ステーション計画には、日本や欧米口加など一六カ国が参加している。計画の主目的は、無重量や高真空などの宇宙環境を利用したライフサイエンスや材料などの分野での実験や地球観測、天体観測である。得られる科学的な知見やもたらされ